

ウサイン・ボルト自伝

ウサイン・ボルト・著
生島淳・訳

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

第1章 俺はこの地球に走るために生まれてきた 8

2009年4月29日 ジャマイカ ヴァインヤード・ツール ハイウェイ20008 / 生き残った俺が、やるべきことはひとつ 13

第2章 チャンピオンのように歩く 16

「君はスプリンターになれる」 16 / 大好きな母さんとの暮らし 21 / 父さんの厳しい掟 26 / 死との遭遇、神の存在 31 / 父さんの恐ろしいお仕置き 35

第3章 最大の敵は俺自身だ 39

才能の開花 39 / 陸上が決めた高校進学 45 / 練習なんかサボってしまえ！ 50 / 「おまえは二度と俺には勝てない」 56

第4章 大舞台に凡人は震え、スーパースターは興奮する 63

「チャンプス」での勝利 63 / はじめてのハンガリー、はじめての炭酸水 69 / 「俺は出たくな

第5章 駆け足の人生 85

い！」——世界ジュニア選手権での飛躍 72 / プレッチャーの先の栄光 77

女性、そしてマリファナの誘惑 85 / アメリカに行くべきか、ジャマイカに残るべきか？ 92 /

100 プロ転向——夢にまで見たパーティ三昧の日々 98 / 地獄のトレーニングに悲鳴を上げる身体

第6章 王者の心と、鋼鉄の意志 106

痛み、そしてケガとの闘い 106 / 幻の世界選手権 III / 「脊椎側彎症」の宣告 115 / アテネ・オリンピックでの惨敗、そしてバッシング 119 / 理想のコーチとの出会い 125 / 最下位になり発見した「王者の心」 132

第7章 「乗り越えるべき瞬間」の発見 138

ジャマイカのファンのことなんて考えるな！ 138 / 走ればお金がどんどん入ってくる！ 144 / 痛みと付き合う方法の発見 148 / 大阪世界陸上——大舞台で初のメダル 152 / ナンバーワンになりたい！ 157 / 走るべきではなかったレース 160

第8章 痛みか、栄光か 165

なぜ1000メートルを走るのか？ 165 / パーティもジャンクフードももうやめだ！ 171 / 衝撃の9秒76 174 / 世界最速の男が生まれた瞬間 179 / 次の標的はアサファだ！ 186 / クラブのライバル意識 190

第9章 今こそ走るときだ 193

誰よりも速く走り、3つの金メダルを取る！ 193 / チキンナゲツト10000個を平らげる 198 /
100メートル決勝。勝負はついた…… 203 / 伝説のポーズ、そして驚愕の世界新記録 212 /
俺が欲しいのは不滅の歴史だ！ 214

第10章 自分のものをつかみとれ！ 217

「200メートルの世界記録も出すつもりだよな？」 217 / 200メートルでの完璧な勝利 223 /
「おまえはもつと速く走れたんじゃないかね……」 231 / 世界新記録を取りに行く！ 232

第11章 勝利の経済 238

速く走り過ぎた罪 238 / 恐るべきドーピング検査 243 / 故郷ジャマイカでの熱狂 247 / ウサ
イン・ボルトというブランドの価値 254

第12章 神からのメッセージ 261

彼女を死なせないでください！ 261 / 下半身が麻痺してしまった!? 264 / 誰かが俺を見守っ
ている 271 / ライバルの言葉が俺に火をつける 273 / スタート前の熾烈な駆け引き 277 / 前人
未踏の世界記録 280

第13章 一瞬の油断、一生の後悔 286

ボブ・マーリーと比べられ、ミツキー・ロークと勝負する 286 / 新しいライバルの登場 294 / 走りのリズムがつかめない…… 298 / 「もしも、フライングをしていなかったら……」 306

第14章 俺の時間がやってきた 310

止まらない痛み、ぬぐえない疑い 310 / 絶対に借りを返してやる 319 / 狂乱のロンドン 324 / スプリンターの遺伝子 328 / 目の前の敵を倒せ! 333

第15章 俺はレジェンドだ 341

「おまえはアマチュアだ!」——オリンピックク2連覇達成 341 / ブレークとのワンツー・フィニッシュ 350 / 「生きるレジェンド」になる 352 / カール・ルイスって何者だ!? 354

第16章 ロケットでロシアへ、そして…… 360

金メダルより、仲間との記念バトンが欲しい 360 / ドラマのない世界選手権での勝利 364 / 俺の時代はまだ終わらない 369

おわりに——感謝を込めて 373

ウサイン・ボルト主要成績 377

訳者あとがき 380

俺はこの地球に走るために生まれてきた

2009年4月29日 ジャマイカ

ヴァインヤード・トール ハイウェイ2000

危ない！ BMW・M3クーペが1回、2回、3回とひっくり返る——俺はハンドルをグッと握っていた。車の屋根は濡れた路面に跳ね返り、側溝に突っ込んだ。車のフロントガラスは壊れ、エアバッグがポンと勢いよく膨らむ。ボンネットは道路にたたきつけられ、めっちゃくちゃにへこんだ。

何が起こったのか気がついたとき、あたりは恐ろしく静かで、大きな大会でスタートラインに立ったときのような緊張感が漂い、不安な時間が流れていた。静寂を乱すのは、どしゃぶりの雨と、ウインカーのチカチカという点滅音だけだ。おそらくウインカーだけが唯一動いているものだった。ひっくり返った車のエンジンからは煙が上がっていた。

ストレスは、精神に大きな影響を与える。運転中、何かおかしいとは思っていたが、気づい

たら車はひっくり返っていた。シートベルトが俺を運転席に縛りつけていた。とんでもないことが起きてしまったが、自分の頭、脚、そして足にケガがないか、確認していった。つま先を伸ばし、ゆっくりと筋肉を確認すると、ありがたいことに痛みはなかった。

「よし、俺は大丈夫だ」。そう言いきかせた。「大丈夫なんだ」

それから、事故が自分の記憶の中でよみがえってきた。おお神よ、まったくひどいことが起きてしまった！俺は田舎道をキングストンからやってきた二人の女友たちとドライブしていた。その日はちょうど、マンチェスター・ユナイテッドがチャンピオンズリーグの準決勝を戦う日で、何がなんでもテレビ放映に間に合うように帰りたかったから、トレローニー近くのデコボコの田舎道を飛ばしていた。

実家があるトレローニーはジャマイカの北西の隅にある村だ。運転しながら頭の中にあっただのは、キックオフの時間だけだったので、何度か危険な運転をした。時々、アクセルを強く踏み過ぎていたし、いつときなど、車とぶつかりそうになった。その車は前を走るバンを追い越そうと、大きくカーブしてきて、対向車線にいる俺の車に突っ込んできた。向こうの運転手はなんとかきわどくよけていった。

助手席に乗っていた女友たちに目を向けたが、彼女は眠りに落ちようとしていた。「こんな道なのにどうやったならそんなにリラックスできるんだ？」と思ったほどだ。

彼女はシートベルトをしていなかったので、揺すって起こした。「もし、寝るんだったら、少なくともシートベルトは締めてくれ。もし、俺が急ブレーキを踏まなくちゃいけなくなったら、

前に吹っ飛ぶぞ」

車は田舎道におさらばして、キングストンの西側にあるハイウェイ2000に入った。そのあたりの道路はスムーズで、俺はエンジンが奏でる重低音を楽しみながら、タイヤを通して湧き出てくるエネルギーを感じていた。そのとき、どこからともなく頭上で稲妻がピカピカと光り、雷鳴がとどろいた。どうやらトロピカル・ストーム（熱帯暴風雨）のど真ん中に突っ込んだようだ。よりによってそのストームはどでかい奴だった。なんてことだ！　そして突然、バケツをひっくり返したような雨が降ってきて、フロントガラスをたたいた。俺はワイパーを最大限に動かし、ブレーキをかけて、少しずつスピードを緩めていった。BMWのタイヤは水が溜まって池のようになつた道路を、シャーといいながら走り続けていた。

雨が降り始めたら、どんなときであろうと安全のためにギアを下げるようにしていた。その車は2008年の北京オリンピックで3個の金メダルを取ったご褒美に、あるスポンサーからプレゼントされた車だった。少し前に俺は、ドイツにある有名なニュルブルクリンクのサーキットにあるドライビングスクールを訪ね、このパワフルなエンジンの操り方を学んだばかりだった。だから滑りやすい路面では、ギアを下げて運転すれば、車のコンプレッションが自然と減速してくるということを知っていた。反対に、急ブレーキを踏むと、車輪がロックされてしまい、スピンを引き起こしかねない。俺は急いでギアを下げて、左足をクラッチから離した。

俺は裸足で運転していた——裸足で運転するのが好きなんだ——車のトラクション・コントロールは俺のすぐ隣にあったのだが、その2、3日前におかしなことが起きていた。運転しながら

シートでもぞもぞ動いているうちに、偶然、トラクション・コントロールのボタンを押したために、タイヤがアスファルトの上で滑り始めてしまった。

今回のこの事故では、ハイウェイに入る際、雨に気を取られているうちに同じ間違いを繰り返してしまっていた。そのトラクション・コントロールをオフにしたままで、それに気づかず走っていたのだ。おそらくそれが原因で事故が起こり、俺は危うく永遠にこの世から消え去ってしまったところだった。

なんとなく車がガタガタしているように感じてきて、車体が時速80マイル（約130キロ）の速さで揺すられているような気がした。

「うーむ、どうも感じがよくない」と思った。それから俺はスピードメーターに視線を移すと、十分に減速していないことが分かった。

79 マイル……。

78 マイル……。

77 マイル……。

アドレナリンが体中を走り抜ける。それは何か悪いことが起きようとしている予兆だった。さつき車がかすかにガタガタしたり、揺れを感じたのは車のコントロールが利かなくなっているサインだったのだ。それはドライブではなかった。雨の中でスキーをしているようなものだった。

76 マイル……。

75 マイル……。

74マイル……。

落とせ！ スピードを落とすんだ！

対向車線にはトラックがやってきて、何本もの消火栓が一齐に放水したかのような大量の水を車輪から俺の車にぶちまけていった。次の一台がトラックの後ろに続いたが、俺の車のスピードは落ちない。バンッ！ 一瞬にして、車の後ろの部分が滑り出してコントロールが利かなくなり、アスファルトの上をまるでアイスホッケーのパックのように滑っていった。どうすることもできなかった。俺の体は重力「G」のなすがままに横滑りした。助手席に座っていた女性は目を覚ました。彼女の目は大きく見開かれ、大きく叫んだ。

「あああああああああああああ！」

車は車線を横切り、ものすごいスピードで道路から飛び出していく。あろうことか本線からほとんど離れていき、視線の先には道路脇の側溝が迫っていた。もうすぐ俺たちはそこに突っ込む……。車の天井に左手をつき、衝撃に備える体勢を取ったが、右手はハンドルと格闘しつつ、もう一度コントロールしようとして必死の戦いを続けていた。

ああ、終わりだ、終わりが近づいている……。おお、神様、これが終わりなのかい？

車が跳ね、ジャンプしながら側溝に突っ込んでいく。俺たちは恐怖に脅えた。

「頼むからひっくり返らないでくれ。おい、頼むからひっくり返るな！」

車は、ひっくり返った。

天地が逆転した。ドラム式の洗濯機の中に入って、何度も何度も回転させられているトレーニ

ングウェアのような気分になった。木、空、そして道路がウィンドウ越しに流れていった。木、空、道路。木、空、道路……。俺たちは側溝にガツンと突っ込んだ。あらゆるものが前に投げ出され、また、すべてが逆さまになった。エアバッグが飛び出してきて、車内にあった鍵、小銭、携帯電話などが音を立てて散乱し、そして気味が悪いほどの静寂が車内を支配した。音を立てているのは、車のウインカーと降り注ぐ雨だけだった。

俺は、生きていた。俺たちは、生きてそこにいた。

俺は車のドアを乱暴に壊して車の外に脱出し、「ああ、無事だった……」と実感した。

しかし、なぜ助かったのかは分からなかった。

生き残った俺が、やるべきことはひとつ

ときとして、人は死と紙一重、隣り合わせになった経験をした後で、その経験がいかに自分の考え方を変えてしまおうかについて語る。俺にとっては、ハイウェイ2000での事故がまさにその瞬間であり、その事故の後では、自分の人生をそれまでとは同じように考えることはできなくなってしまうた。俺たちは生き延びた。しかし、どうやって？ 三度も回転した車の残骸から無事で逃れられることなんて不可能なはずだった。

世界中の人間が、スピードこそがボルトの得意分野だと思っっているだろうが、それにしても高速のスピードと大きな馬力が自分の人生を永遠に奪ってしまうなんて考えてみたこともなかった

し、事故から数時間後、俺は交通事故で助かった幸運なドライバーが感じるであろうありとあらゆる感情を経験した。命は助かったものの、打撲、裂傷、むち打ち症になってしまった女友だちに申し訳ないという罪悪感もあった。頭の中で事故を思い出し、死の瀬戸際まで行ってしまったことに思いを馳せると、体がガタガタと震えた。スピードを出し過ぎてコントロールを失い、時速70マイルでひっくり返りながら道路を横切り、側溝へ突っ込んでしまったのだ。

真実は、俺が死んでしまってもおかしくなかったということだ。世界の天才的なアスリートが絶頂期に亡くなるという、恐ろしい新聞の見出しを世界中の人が読むかもしれなかったのだ。

世界最速の男、交通事故死！

オリンピックの金メダリスト、1000メートル、2000メートル、4000メートルリレーーの世界記録保持者が、いかにして生き急ぎ、若くして亡くなったかは記事で詳しく！

俺が生き残ったという事実は、奇跡以外の何ものでもなかった。自分の体はすべて無事で、機能障害もないし、体中のどこを探しても痣あざひとつなかった。そういうえば、小さな棘とげが足に刺さっていた。車の残骸から抜け出すときに、何本かの棘が足に刺さり、その傷はちよつと深かった。しかしそんなものは、起きてしまった事故の大きさから比べれば、小さなものでしかなかった。「マジかよ?」。退院した日に車で迎えに来てもらったとき、俺はそう思った。「五体満足なままだ。いったい、どうやったらこんなことが可能なんだ?」

2、3週間して、インターネットでメチャクチャになった自分の車の写真を見て、再び恐怖を感じるようになった。「何か巨大なもの」が自分の命を救ってくれたのだと、その写真を見ながら確信した。それは車のエアバッグのデザイナーやシートベルトの設計者とかそういうものではない。より高い次元の力が俺を生かしたのだ。それは全能の神だ。

俺が生き残ったのは、地球上で最速の男として選ばれたというお告げであり、事故は上界からのメッセージなのだを受け取った。勝手な考えかもしれないが、神は最速の男の座に就くのは俺だと考えているようだ。ジャマイカの森ではじめて走り始めたときから、俺は神が定めた道を何年にもわたってたどってきたのだ。俺の母さんは信仰が篤いから、すべての出来事には理由があると信じていた。年を重ねるにつれ、自分にとっても信仰は大切なものとなり、だからこそ、この事故はなんらかのメッセージ、警告だと受け入れるようになった。このお告げは、大きなネオンの光で輝いているようだった。

「おい、ボルト！ 私はおまえに、世界記録も超えられるほどのすばらしい才能を与えた。これからも面倒を見続けるつもりだ。だが、今こそおまえは真剣に考えなければならぬ。安全運転で、くれぐれも気をつけるのだぞ」

なるほど。神はいいところをついていた。上界の神は俺に才能を与えてくれたが、その能力を最大限に引き出すときが来たのだ。俺の目は見開かれた。神はそばにいて、走るために俺を遣わした——歴史上、誰よりも速く走るために。

このメッセージは、なんともクールな知らせだった。

第2章 チャンピオンのように歩く

「君はスプリンターになれる」

俺はビッグな大会で走り、勝つために生きています。重要な大会になればなるほど、生き生きとしてくる。通常のレースでも燃えるものはあるし、とんでもない負けず嫌いだから勝ちたいと思うが、本当のことを言えば普通のレースでは100パーセントの情熱は湧いてこない。

俺が本当に研ぎ澄まされ、覚悟を決めて挑み、力を発揮するのは大きな大会、たとえばオリンピックで金メダルや世界記録を狙うときだけだ。他の場所で過ごす時間は、いたって普通の精神状態の男にすぎない。

でも、大舞台での決闘、挑戦といった機会を与えてくれるのなら、俺は本気になる。3センチも身長が伸びたような気分で堂々と胸を張って歩き、0コンマ1秒でも素早く行動する。おそろしく俺はレースで勝つためにハムストリングを最大限に伸張させている。目の前に大きなハードル、たとえばオリンピックピックのタイトルや、ヨハン・ブレークのような骨のある相手と競うことに

なると、途端にハングリーになる。

トレローニーのシャーウッド・コンテントにあるウォルデンシア小学校で、俺は最初に大きな難関に直面した。8歳のときは、エネルギーがあり余ったギャングじみた子どもで、いつも面白そうなことを探していた。今振り返ると笑ってしまいが、俺はいつも走り回っていたから、学校でスポーツに熱心に取り組んでいた牧師のデビア・ニュージェント先生が、いつウサインをレースに出すのかと話題にし始めた。俺はそのときはクリケットが大好きで、十分に足は速かったけれど、他のクリケット選手を圧倒するようなスピードを持っているとは思っていなかった。ある日の午後、校庭でクリケットをしていると、ニュージェント先生が俺のことをグラウンドの傍らに呼んだ。スポーツが盛んになるシーズンが目前に迫っていて、先生は俺が100メートルのレースに出る気があるかどうか知りたがった。

俺は肩をすくめて、「たぶんね」と答えた。

ジャマイカでは小学1年生のところから、誰もがスポーツに親しみ、駆けっこでは1対1で競走していたが、その時点では俺は学校でいちばん足が速い子どもというわけではなかった。ウォルデンシア小学校ではリカルド・ゲツデスという奴が短距離走では俺よりも速かった。子どもたちはストリートで競走したり、競走目的ではなくグラウンドで遊び回ったりしたが、たとえ遊びの場面でも俺はそれを競走として真剣にとらえていた。リカルドに負けると、俺はいつも怒り出すか、泣き出す始末だった。

「負けるなんて、我慢ならない」とうめいたこともあったし、頭の中でレースを思い浮かべたこ

では誰とも100メートル走や走り幅跳びの話をした記憶がなかった。本当にやりたかったのは、クリケットで得点を稼ぐことだった。速く走るのは、クリケットでバツマンをアウトにするための方法にしかすぎず、自分の身長や身体の強さもクリケットのためにあると思っていた。それからニュージェント先生はちよつとずるい手を使い始めた。俺を食べ物で釣ろうとしたのだ。

「ボルト、君が学校のレースでリカルドを負かしたら、ボックスランチをプレゼントしよう」と言ってきた。先生はさすが教育者、少年の心をぎゅつとつかむには、胃袋に働きかけるのがいちばんだと知っていたのだ。

俺は単純だから、本気になってしまった。ボックスランチは誰もが食べたくなるもので、こんがり油で揚げてあるチキン、焼きスイートポテト、そしてごはんと豆が添えてあった。突然、目の前にご褒美の賞品がぶら下がったのだ。勝つことで得られる報酬は俺を興奮させ、大舞台上で競走するスリルを想像させてくれた。選りすぐりの選手たちと競う前日に、生まれてはじめて、エネルギーがみなぎってくるのを感じた。ウォルデンシア小学校の二人のトップスターが1対1で対決する。そういう話なら、俺を止めるものはもう何もなかった。

「分かった、分かったから、ニュージェント先生」と俺は言った。「そういうことなら、やりますよ……」

スポーツ・デイ（体育祭）はウォルデンシア小学校では大きな行事で、ジャマイカの田舎の小学校では町をあげてのイベントだった。小学校は熱帯雨林を切り開いて造られ、丘の上に小さな

平屋の教室が並んでいた。ココナッツと野生の森林がその土地を取り囲み、教室の屋根は波板で造られていて、教室の壁はピンクや青、黄色のような原色で塗られていた。学校には何面かのスポーツグラウンドがあり、ゴールポストや、クリケット場、雑草が生えたデコボコの陸上トラックがあったが、レーンの色は黒で、それはガソリンで地面を焦がして造ったものだったからだ。ゴールラインには掘っ建て小屋が立っていた。レース当日は、学校全体が俺のことを応援するために、いろいろ準備をしてくれているような気分になっていた。

心臓の鼓動は速まり、頭の中ではこれはオリンピックの決勝並みにどでかいイベントだと信じ切っていた。そして、ニュージェント先生が「スタート！」と叫んだ瞬間、とんでもないことが起きた。俺はスタートから素早く体勢を起こして、トラックを飛ぶように走った。大舞台で競う興奮が自分を後押ししているような感覚になったのは、生まれてはじめてのことだった。最初、リカルドが俺の後ろにいろことが分かった。彼は呼吸が荒かったが、コーナー付近で俺の視界には入ってこなかった。俺はストリートレースでレース勘を鍛えていたから、これはいい徴候だと思った。それから何メートルかが過ぎ去ると、彼の息づかいが遠ざかった。それはますますいい知らせだった。俺の大きなストライドは十分なリードを生み出し、100メートルを走り切る一人旅だった。リカルドの姿はなかった。ゴールテープを切るころには、大量リードを奪う圧勝だった。俺は最初のビッグレースに勝ったのだ。

よし！ 勝利は歓喜、感情の爆発だった。喜び、自由、楽しみ——様々な感情が一気に押し寄せてきた。学校のスポーツ・デイのような大きなイベントでレースに勝つ意味は特に大きく、こ

のイベントで俺はウォルデンシアで最も足が速い子どもという正式なお墨付きをもらったのだ。生まれてはじめて、真剣な競走が生み出す興奮が、自分を進化させたのだ。世界記録や金メダルは遠い先の話だったが、このリカルドとのレースは俺を陸上に真剣に向かわせるきっかけになった。俺は勝者となったとき、あることを悟った。

「ナンバーワン」になることは、とても気持ちのいいものだということ。

大好きな母さんとの暮らし

自宅には一枚の古い写真があって、見るたびにいつも笑ってしまふ。俺が小さいころの写真だ。おそらく7歳ころで、通りで母さんのジュニアと一緒に立っている。その当時、すでに俺の身長は母さんの肩くらいまで到達していた。俺は細いブラックスジーンズに赤のTシャツを着ていて、スタイリッシュに見える。母さんの手をぎゅっと握り、体をぴったりとくっつけていて、「僕に用があるなら、母さんを通してからにして」と言っているようだ。それはとても幸せな時間であり、幸せな場所だった。

俺はそのときも母さんっ子だったし、今でもそうだ。俺が泣くのは、何か悲しいことが母さんの身に起きたときだけだ。母さんが怒り出すのを見るのが嫌いだ。父さんとは仲良しだし大好きだが、母さんとの絆は特別なもので、それは俺が母さんが腹を痛めたただ一人の子どもで、ずっと甘やかされてきたからだと思う。

実家はシャーウッド・コンテントのウォルデンシア郡に近い、コクシースという小さな村にあったが、そこは野生の森林が青々と生い茂る、息をのむほど美しいところだった。その地域にはそれほど多くの人はい住んでおらず、2、300メートルに一軒か二軒ぽつぽつと立っているだけで、家族は父親が借りた簡素な平屋の家に住んでいた。生活のペースはとてもゆったりしていた。本当にゆったりと。車が通ることはまれで、道路はあってもいつもがらんとしていた。コクシースに交通渋滞といえるものが存在するとすれば、それは友だちを見送るために通りに出るときだけだった。

俺の故郷がいかに隔絶されていたかを想像してもらうには、この地域全体がコックピット・カントリーと名付けられていたことから分かる。なぜなら、ここは、1700年代に住みついた西インド諸島からの逃亡奴隷たちである「マールーン」が守備拠点として使った場所だったのだ。マールーンはその地域を基地として使い、植民地時代にそこを拠点としてイギリス軍の砦とりでに攻撃を仕掛けた。もしも、彼らの生活がそれほどまでに暴力的でなかったら、コクシースやシャーウッド・コンテントでの生活はこの上なく幸せなものだっただろう。空はいつだって晴れわたり、太陽の光はあつく、まれに空に雲がかかったとしても、雲が浮かんでいいる空を見ると穏やかな気持ちになれた。雨が降るとそれを「液体の太陽」とみんなが呼んでいたことを思い出す。

これだけ気候に恵まれていたにもかかわらず、観光客が訪れることはめったにないが、ガイドブックに目を通して訪れた人は、書いてあることを実際に目にするようになる。たとえば、こんな具合だ……。「そこにたどり着くためには車で行くしか方法はなく、ドライブは極めて危険で

ある。道路は曲がりくねり、熱帯植物が覆いかぶさってきて、しかも道路はデコボコだらけだ。また、一方には急流が流れており、その反対側にはジャングルの葉が生い茂っていて、そうかと思うと、ニワトリが道路にいつ何時飛び出してくるか分かったものではないから、気をつけて運転しなければならぬ。そしてコクシースの道を30分も運転すると、やがて谷にある小さな村が見えてくる……。そのように紹介されているが、行ってみる価値はある。そこは俺のパラダイスなのだ。

そんな場所で生活していたわけだが、子どもどものときの経験がオリンピックのレジエンドになるための道筋だった、と後から気づいたのは、それほど驚くことではない。村にはいたるところに冒険があった。それは自分の家の中でさえそうだったし、俺は村で史上最強の行動派だったから、家の周りの歩ける範囲にも、たくさんのお楽しみを見つけたことができた。

俺が生まれたときには、みんな「こんなことがあり得るのか！」とたまげたそうだ。なぜなら、あまりにも大きかったからだ！ 9・5ポンド（約4300グラム）も体重がある赤ん坊だった。父さんによれば、それだけの体重があったから病院の看護師さんたちは、俺が生まれたときの「巨体」についてジョークを言い合っていたそうだ。

「なんてこと、この赤ちゃんは地面の上を長いこと歩いてきたみたいよ」と看護師さんは言うつて、俺を抱き上げたそうだ。

もしも、身体的な大きさが最初の天からの贈り物だったとしたら、ふたつ目の贈り物は誰にも止められないエネルギーだった。生まれた瞬間から、俺はすばしこかった。赤ん坊のときからと

どまることを知らず、はいはいができるようになってからは、さらに爆発的な活動量を見せていた。どのソファも俺の前では安全ではなく、手の届かない食器棚はないし、家に置いてあった高級な家具でさえも、俺には遊び道具でしかなかった。1秒たりともじっと同じ場所に座っていることができなかったのだ。いつも何かを探して歩き回り、すべてのものに上りたがり、やがて家族は俺の遊びに対する情熱を持て余すようになってしまった。ある日、頭からドアに1000回くらいもぶつかっていったのを見た家族は、お医者さんに相談しに行った。

父さんは、「この子はいつも動き回って、止まることを知らないんです」と訴えた。「この子はエネルギーがあり余ってるんです！　どこか、異常なところがあるとしたか思えないんです！」

先生は父さんや家族に、俺の状態はとにかくケタはずれに活動的ではあるが、どこにも問題はないと太鼓判を押してくれた。先生に言わせれば、この子は成長が早いんですよ、ということなのだ。でも、おそらく家族にとって俺は手に負えず、この息子のどこからこんなパワーが湧いてくるのか、誰にも分からなかったのだと思う。母さんも父さんも、若いときにはアスリートではなかった。もちろん、同じように学校では走り回っていただろうが、後に俺が到達するようなレベルであるはずもない。

一度だけ、母さんがわが家の台所に侵入したニワトリを追いかけて、通りにダッシュするのを見たことがある。夕食用の器に盛りつけていた魚をニワトリが盗んだのだ。ウォツ！！　その光景は、アメリカの200メートルと400メートルのオリンピックメダリスト、マイケル・ジョーンソンがトラックを走っているのを見るようだった。母さんは、羽をむしられることを恐れたニ

ワトリが魚を落とす森の中に逃げていくまで追い続けた。俺は父さんから身体的な素質を受け継ぎ（父さんは1メートル80センチあるし、体形は同じようにスリムだ）、母さんは俺が必要とした他の才能をすべて与えてくれた、とジョークを飛ばしている。

トレローニーでの生活のペースは両親に合っていた。二人とも田舎で育った人間だったし、キングストンのような都会で忙しく働く必要はなかったものの、一生懸命に働いていた。休みを取るようなタイプではなく、1秒たりともムダにしなかった。父さんは、地元のコヒー会社のマネージャーだった。コクシーヌから南に数キロのところにあるウインザー地方では、たくさんのコーヒー豆が生産されているが、父さんの仕事は、それらの豆が大きなジャマイカの工場にきちんと納品されるように手配することだった。父さんはいつも早起きして、国中を出張で飛び回っていた。帰りはいつも遅かった。小さいころ、夜の6時か7時にベッドに入ったら、父さんの顔を何日も見る事ができなかった。働きづめだったからだ。父さんが夜に帰ってくる時はいつも、俺は深い眠りの中にいた。

母さんも父さんと同じように仕事熱心だった。母さんは洋裁をやっていて、家中に素材やピン、針などがあつた。村のみんなは、洋服の修繕が必要なときはいつでも、わが家までやって来た。俺に何かを食べさせたり、カーテンにぶら下がっている俺を引きずり下ろそうとしているとき以外は、母さんはいつもコットンを縫い、ボタンを付け直したりしていた。その後、成長するにつれ母さんの仕事を手伝うようになると、俺はズボンの裾を折り返して、ピンで留めてから縫えるようになった。もしシャツが破けたりしたら、今でも自分で縫えるけれど、母さんにやって

もらうだろう。なぜなら、母さんはいつも「直し屋」だったからだ。母さんがすごいのは、アイロンなどが壊れたとき、仕組みを知っているものであれば自分で修理してしまうことだ。俺が子どものときおっちよこちよいだったのは、母さんがなんでも直してしまおうからだと気づいた。家のモノを壊しても、それをいつもなんとかしてくれたのだ。

父さんの厳しい掟

コクシースに住んでいる限り、腹ぺこになることはなかった。俺たちが住んでいる地域はとても豊かな農村地帯だったからだ。代表的な農産物は、ヤムイモ、バナナ、ココナッツ、ベリー、サトウキビ、ジェリー木、マンゴー、オレンジ、グアバなどだ。どれもこれもが家の裏で実をつけていたから、母さんはフルーツや野菜を買うためにスーパーマーケットにまで足を延ばす必要がなかった。季節ごとに農産物が実るので、腹が減ればいつでも好きなものが食べられた。バナナは木からぶら下がっていたし、ひよいと手を伸ばして、もぎって食べればよかった。ポケットに小銭がなくても何の問題もなく、お腹がグウと鳴れば、俺は木を見つけ、何かフルーツをもぎって食べればそれですんだ。知らないうちに健康的な食生活を送り、体は良質なもので満たされていたのだ。

この環境で自然と体も鍛えられていた。

コクシースの野生林は天然の遊び場のようだった。家の玄関から外に一步踏み出せば、運動す

るものにあふれていた。村にはいつでもどこにも遊び場があり、走り、登る場所があった。森林の中では折れたココナッツの木が障害物となり、スプリンターに憧れる子どもたちはそれを飛び越えていた。短距離を走るために最適な練習コース、そして練習メニューが自然と用意されていたのだ。一日中座ってコンピュータゲームで遊んでいる最近の子どもたちには想像もつかないだろう。とにかく外で遊ぶのが大好きで、追いかけて、探検、そして裸足でできるだけ速く走り回るのが好きだった。

こうした森は外部の人たちから見れば、ワイルドで危険に映るだろうが、成長するためには安全な場所だった。森では犯罪なんて起こらず、サトウキビ畑には、何も危険なものも待ち伏せしていないなかった。ただし、ジャマイカン・イエロー・ボアと呼ばれるへびに驚くことはあった。みんな家の中でそのへびを見つけると、悲鳴を上げたけれど、それさえも害のない侵入者だった。いつだったか、ある男が鉈なたでへびをやっつけ、通りに投げ捨てたと聞いた。へびが100パーセント死んだと確認するために、それからそれは車のタイヤで轢ひいてから火で燃やしてしまった。これがトレローニー流の害虫駆除だった。

俺はどこにでも走っていたが、いちばん好きだったのは追いかけることとスポーツをすることだった。5、6歳になると、クリケットの魅力に取りつかれ、通りのどこでも機会があればそればかりやっていた。クリケットがプレーできるならいつでも、友だちと一緒に投げたり打ったりしていた。だいたいはテニスボールを使っていたが、誰かが木々の中や、牛飼いの場に打ち込んでボールが見つからなかったときには、ゴムのバンドや古い糸を丸めた代用品をこしらえてゲーム

を続けた。

それからみんないろいろと工夫して、自家製のボールを使って何時間もゲームに夢中になった。クリケットに必要なウィケット（三柱門）を作るときには、俺はよりクリエイティブな能力を発揮した。バナナの林に入り込んでいき、大きな木を引っこ抜いた。木の皮に3本の切り株をくくり付け、底が平らになるまで形を整えた。そうして作ったウィケットをグラウンドに立てた。もし、どうしてもプレーしたいのにウィケットや道具がそろわなかったときは、石を積み重ねたり、段ボールをうまく切ったりしてウィケットを作り、試合をしたものだ。

でも、子どものときに過ごした時間の全部が全部、楽しかったわけではなかった。家族の中には掟おきてとも呼ぶべきものがあり、子どもであれ、大人であれ、働かなければならない時間があった。父さんは、自分自身が子どものときに身に付けた働く習慣が息子にないことを不安に思い、俺が成長していくにつれて、家の周りの簡単な仕事、たとえば掃き掃除でもいいから手伝いなさい、と口を酸っぱくして言っていた。だいたいはきちんとなしたつもりだったが、一度でもそういう仕事から逃げ出そうものなら、父さんはブツブツと文句を言い始めるのだった。

「こいつは怠け者だ」。父さんは何度も何度も言ってきた。「ウサインは家の中で、もっと仕事をしなきゃいかん」

大きくなり、家の周りの力仕事ができるくらいになると、俺はますます手伝いをするのが嫌いになった。家には水道管が通っていないから、バケツを持って近くの小川に水を汲みにいき、庭にある4個のドラム缶に溜めておくのが仕事になった。毎週、父さんが家に戻る

と、俺は川から水を汲んでくるように命じられるのだが、困ったことにドラム缶1個につき、バケツ12杯分の水が入るので、48往復もしなければいけなかった。水が入ったバケツはもちろん重く、それはとてもつらい仕事だった。水運びから逃れられるのなら、なんだってするという気分になっていた。

最終的に俺は、ドラム缶を満たすために48往復することは時間がかかり過ぎるし、やってられないと思ったから、一度にバケツ2個を運ぶことにした。ただ、重さが2倍になると余分な痛みを伴う労力が必要で、運ぶのには本当に苦労した。どうにかして楽をしたいと思っただけだが、一度に2個のバケツを運ぶことは結果的に身体を発達させることにつながった。自分の腕、背中、脚が、毎週毎週発達していくのを感じることもできた。体幹がしつかりとするにつれて、ジムに行ってるわけでもないし、バーベルを上げているわけでもないのに筋肉がついてきた。競走に必要な筋肉をつけるトレーニングをこのときすでに始めていたのだ。これだけは覚えておいてくれ。怠け癖が俺をより強くしたのだ。父さんに手伝いを命じられ、歩き、登り、走ることで、俺は大きくなり、より力がみなぎる人間へと成長していった。

おかしなことに、父さんが近くにいないときには、母さんは俺が嫌がることを一切強要しなかった。父さんに見つからないように水運びをサボらせてくれたこともある。父さんの説教が始まるのは、父さんが仕事を早く終えて帰ってきて、サボっている息子を見つけたときだった。父さんは、母さんに向かって「ウサインをかわいがり過ぎなんだ」と文句を言い、たしかに俺もそうだと感じてはいたが、俺は母さんにとって一人っ子だったし、母さんとの絆は俺にとって特別な

ものだった。

時々、父さんは厳し過ぎることもあった。父さんは俺が外出するのを好まなかつたし、もしも家にいようものなら、父さんの目の届く範囲、特に家の庭で遊ぶように強要してきた。だが、父さんが仕事に出かけてしまえば、母さんは俺を出歩かせてくれた。それに、俺は鈍い奴とはほど遠かった。どこにいようとも、父さんのバイクが丘を越え、村に入って電動のこぎりが出すようなバイクの音が聞こえたら、どんなことをして遊んでいようともそこから抜け出し、ありつたけのスピードを出して家まで全力で走ったから、父さんが俺の行動を怪しむ前に家に着くことができた。

父さんのいつもの帰り道から離れている友だちの家まで、こっそりと遊びに行くこともあった。古いバイクの爆音が聞こえないという問題が生じたが、俺は次の手を用意していた。家から忍び出るときには、いつも愛犬のブラウニーと一緒に連れていった。父さんのバイクが音を立てて家に向かってくるのが聞こえると、誰よりも早くブラウニーの耳がその音をとらえ、ピンと逆立つのだった。この愛犬が家に向かって走り出すのが、俺が家に帰るべき合図だった。そんな駆け引きの中で、ブラウニーは俺の将来につながる感覚を味わわせてくれた。

スタートのピストル音を待ち……。
バンツ！

ブロックを蹴れ！ 走れ！ 走るんだ！

はじめてのコーチは、犬だったというわけだ。面白いだろ。

死との遭遇、神の存在

家族について、もうちょっと説明させてほしい。俺にはサデイキという弟と、クリステイーンという姉がいるが、それぞれ別々の母から生まれた。この話を奇妙に思う人が多くいるかもしれないが、ジャマイカではこうした家庭生活は決して珍しくはなかった。それに、俺が生まれたときには父さんと母さんは結婚もしていなかった。それでも、母さんにとってはいした問題ではなく、腹違いのサデイキとクリステイーンがコクシースに泊まりに来たときは、自分の子どものように家に迎え入れていた。

俺は大きくなるにつれ、きょうだいや家族の関係だとか、家族愛だとか、結婚という概念を理解できるようになったが、それでもわが家の家族関係で悩まされるようなことはなかった。父さんと母さんは俺が12歳のときに最終的に結婚したが、俺が唯一、家族のことでキレたのは、結婚式でベストマン（新郎の付き添い人の代表）と同格の「リング・ボーイ」（結婚指輪をのせたリングピローを運ぶ男の子）に選ばれなかったときだけだ。俺は家族の一員として父さんに結婚指輪を渡したかったのだが、たぶん俺は幼過ぎると判断され、その役目は村の誰かに持っていた。俺は腹違いの姉弟がいることをまったく気にしたことはなく、それが自然に思えた。いずれにせよ、俺の家族は、親族関係や友情について、なるようになれというスタンスを取っていた。互いにかしこまるようなこともなく、特に普通だったらプライベート過ぎると思われる内容でもか

まわす話をした。俺は両親と仲が良かったから、なんでも包み隠さず話すことができたし、最近でも二人と電話で話をするとき、両親の性生活が時々話題に上ることがあるくらいだ。特に父さんに関しては何も手がつけられない。

とにかくクレイジーなのだ。俺は父さんとは天気や車など何についても話すことができるのだが、結局はどういうわけか、寝室でどんなことが起きるのかという話になってしまふ。俺の記憶では、はじめてそんな話になったのは、両親とスピーカーホンで話していたときだった。「父さん、最近どう？」とくだけた調子で話していると、セックスの話が始まった。

「あのな、ウサイン」と父さんが答えると、「ありや、いいもんだな。俺も気持ちがいいし、母さんもいいんだよ、これがまた。俺たちはさ、あればっかりやっている……」

信じられなかった。さすがの俺も、両親とそんな話をするようになるとは想像できなかったのだ。「なんだって?」。俺はぶつたまげて、「母さん、父さんを止めてくれ!」と言うのが精いっぱいだった。

いつだって俺は、どんなことを耳にしても平静でいられるのだが、それは子どもするときから長年にわたってこうした会話を聞いてきたからだと思う。ときには、父さんの友だちが朝の6時ころ、通勤途中で車のウィンドウを開け、ありとあらゆる汚い言葉を使って叫んでいるのも聞いたことがある。

人生において、すべてのことが完璧に運ぶとは限らないとはじめて悟ったのは、俺が「死」というものに最初に触れたときだったと思う。俺のおじいさん、つまり母さんの父さんは家で亡く

なった。おじいさんは、家の中で薪まきを運んでいるとき、濡れた床で足を滑らせ、転んだ拍子に頭を打ち、そのまま冷たくなってしまった。その事故は俺の目の前で起きてしまったのだが、意識を失い生気のなくなつたおじいさんを見つめることしかできなかつた。無力だつた。まだ9歳の子どもだつたから、応急処置の仕方なんて知らない。パニックになり、助けを求めに外に出たが、母さんも近所の人たちも出払つていた。後になつて、俺にできることは何もなかつたのだと慰められた。実は、おじいさんは心臓発作に見舞われたのだつたが、たとえ助けを呼べたとしてもコクシーヌは町なかからとても離れていて道路も悪かつたから、誰もおじいさんの命を救える時間内に病院に連れていくのは無理だつたのだ。おじいさんは、倒れてからほどなくして、息を引き取つた。

子どもだつた俺は、死に対して免疫がなかつた。実のところ何も感じなかつたが、それは何が起きているのかさっぱり理解できなかつたからだ。葬式に参列し、母さんやおばさんたちが泣いていたから、みんなが悲しんでいるのは分かつたけれど、俺の年では同じように悲しむことはできなかつた。母さんが悲しむのを見るのは忍びなかつたが、死や葬式というものがどんなことなのか、幼過ぎてよく分かつていなかつた。おじいさんを埋葬した後、俺はすぐに友だちと遊びに出かけてしまった。

宗教も俺を混乱させた。それは、家族、特に母さんにとってには重要なものだつた。彼女はクリスチャンで、セブンスデイ・アドベント教会に属し、土曜日が安息日だと信じていたので、毎週土曜日には一緒に教会へと足を運んだ。父さんはそれほど敬虔けいけんではなかつた。両親が一緒に

教会に行くのは、クリスマスと大晦日の一年に2回ほどで、宗教は父さんにとって重要なものはなかったにせよ、母さんの信仰心の篤さについては敬意を払っていた。母さんは、俺が成長するにつれ信仰を促したが、強要はしなかった。それでも母さんは俺に聖書を読むように勧め、善悪について教えたが、俺が宗教に対して嫌気がさして拒否することがないように、押し付けがましくはなかった。

「私が誰かに無理強いしたら、きつと、みんなは私が望むのとは別な方向に向いてしまおうでしょうね」と母さんは言ったことがあった。

母さんの優しいアプローチにもかかわらず、教会に通うのは好きになれなかった。大きくなるにつれ陸上の試合に出るようになる、週末に行われる試合があれば、教会に行かなくて済むので俺は安堵した。そのかわり、母さんは俺に朝の祈禱きとうをさせた。20分ほどかけて、讚美歌を歌ったり、お説教を聞いたり、聖書の言葉を暗誦あんしりょうするのだ。母さんには、これが週末に教会に行けないことへの埋め合わせだと考えている節があった。

その習慣は俺にずっとつきまತ್ತたが、年を重ねるにつれて神様から特別な才能を与えられていると信じるようになる、自然に宗教へと関心が向くようになった。「神は自ら助くる者を助く」のだと理解するようになったのだ。だからこそ、コーチが計画したすべての練習を終え、スタートラインに立つときはいつでも、首に掛けた十字架を握りしめ、空を見上げ、神様に「ベストを尽くせる力をお与えください」と祈るのだ。

神様との短い会話を終えたら、あとは自分の仕事をするのみだ。

父さんの恐ろしいお仕置き

優秀なアスリートだからといって、スタートラインに立てばいつでも勝てるわけではない。ハードな練習が必要なのだ。練習や生活、そしてレースで規律が守れないようでは、金メダルなんか取れっこないし、記録を破ることなんてできないと分かっている。そしてボルト家には、一生懸命に仕事をすることはもちろん、他にも規律、それも半端ではない規律があった。

父さんは子ども思いで、俺のことをとてもかわいがってくれたし、小さいときには俺のためになんでもしてくれた。その一方で、父さんは家長であり、厳格で、伝統的な価値観を持ち、マネーや他の人を尊重することを常に重視していた。俺は決して悪ガキではなかったと思うが、もしもある一線を越えようものなら、父さんは俺を厳しく叱った。もし、俺が父さんにとって本当に許しがたいことをしたとなると、それはそれは厳しく罰せられた。父さんは尻を叩いたが、それは彼が古いタイプの人間で、実際、自分も親からそうした扱いを受けながら育ったからだ。そうした体罰は、俺にとっていつも恐ろしいものだった。

最近では、子どもに対するこうした体罰を含むしつけを虐待だと感じる人もいるようだが、ジャマイカでは子どもたちが悪さをしたりトラブルを起こしたら、こうした扱いを受けるのは珍しいことではなかった。とにかくありとあらゆることで尻を叩かれたから、いつぶたれるか予想できるようになった。もし、父さんに呼びつけられたとしたら、目の前に立ってから数秒のうちに叩

かれると覚悟し、身を硬くして備えるのだった。

しかし、父さんが心底怒っているときは、話し合うことを望んでいいるから、俺の尻は大丈夫だった。尻を打つのは常に最後の手段で、ときには父さんが話して、話して、話しまくる手段を選び、静かになるのは、お仕置きを食らうことを意味していた。俺が家でふざけ過ぎたときは、ベルトを使った罰が待っていた。外でバカげたことをした場合も、父さんは俺をつかみ、そして罰した。バチツ！ バチツ！ ものすごい音がした。一発叩かれるたびに地獄に墮おちるような気がして、それから涙が頬を伝わり落ちるのだが、尻を叩かれることを恨んだことはなかった。両親は善悪の判断を教えてくれて、その教えがあつたからこそ、俺は一人前の男になることができたのだ。

俺の父さんの性格を象徴するものといえは、何をしても敬意を払うということだった。礼儀正しくあることが父さんにとっては大切で、俺にも同じような価値観を持って育ってほしいと願っていたから、俺は謙虚に、ほがらかに育てられた。父さんは手本も示してくれた。父さんは誰に対しても謙虚な姿勢を崩さず、他人にも同じように接してくれることを期待していた。もしも、父さんの周りに無礼な奴がいたら、父さんは我慢がならなかった。善人であれ悪人であれ、シャーウッド・コンテントに住む者が無礼な態度を取るなら、誰であつても家から追い出したほどだ。

そのころ、俺はこの礼儀作法にほとほと嫌気がさしていた。ウォルデンシア小学校に上がりた

てのところだから、5、6歳だったろうか。登校途中、村で出会った人たち全員に「おはようございます」と挨拶するように父さんからの命令が下った。それが誰であろうと、何をしていようとおかまいなしに、顔を合わせた全員に挨拶をしなければならなかった。これはバカげたことだった。俺は登校途中、だいたい20人の人たちに向かって「おはようございます」と挨拶していた。道を歩きながら、「おはよう、おはよう、おはよう」と繰り返していたから、おかしい奴に見えるに違いなかった。

ほとんどの場合、みんなは笑顔で挨拶を返してくれたが、ある家の門の前に立っていたおばあさんだけが問題だった。毎日丘を上っていくと、彼女がいつも視界に入ってくる。俺は父さんの言いつけを守って、会釈しながら「おはようございます」と挨拶をするのだが、彼女は一度たりとも笑顔を見せることもなければ、返事もなかった。ただの一度もだ。それどころか、彼女はにらみつけてくるのだ。はじめはやり過ごし、彼女から返事がないと知りながらも毎日挨拶していたが、ある日、ついに堪忍袋の緒が切れた。

「バカにすんな！」と俺はいきり立ち、「向こうが失礼な態度で無視するのに、なんで俺が『おはようございます』って言わなきゃならないんだ！」と頭にきていた。

ある朝、俺はいつものようにおばあさんの家に近づいていき、彼女を見かけたが、そのまま歩き去った。会釈することもしなかったし、「おはようございます」と挨拶もしなかった。そして、ひと言も言葉を発せず歩き続けた。それで終わりと考えたが、甘かった。そこはジャマイカであり、子どもが年長者に無礼な態度を取ることには眉をひそめられる行為だったのだ。その日の午

後、帰宅すると、俺は自分の目を疑った。家の中にあのおばあさんがいて、悪意のこもった目つきで俺を見ていた。彼女は俺をにらみつけていた。彼女は腕組みをして、脚を組んでいた。彼女に欠けていたのは、俺をぶつたための棒だけだった。そして父さんが俺のシャツをつかんだ。

「ウサイン」。父さんは落ち着いて、静かに話し始めたが、それはとんでもなくまずい状況になったことを示していた。「父さんはおまえに、通りですれ違う人には、誰にでも『おはようございます』と挨拶をするように言わなかったかい？　どんなことがあっても」

「でもさ、父さん」と俺は反論して、「俺はずっとこのおばあさんにも毎日、『おはようございます』って挨拶してきたんだよ！　でも、おばあさんは……」

「どんなことがあるらうと、だ！」と父さんは繰り返した。

俺はそのおばあさんに対して、激怒していた。おばあさんはお仕置きのフルコースを持ってきたようなものだったからだ。しかし、これは成長する過程で大きな教訓になった。尻を何度も打ち据えながら、大人たちは俺に礼儀正しさの重要性を諭し、今まで以上に尊敬心を持つように教えたのだ。それからは、誰に対しても無視なんてしなくなった。とにかく、俺はいきがるんじゃない。なかつたと後悔したのだった。

ウサイン・ボルト自伝
ウサイン・ボルト・著 生島淳・訳

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定価：2,300 円（本体）＋税
発売日：2015 年 5 月 26 日
ISBN：978-4-7976-7277-0 C0098

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)